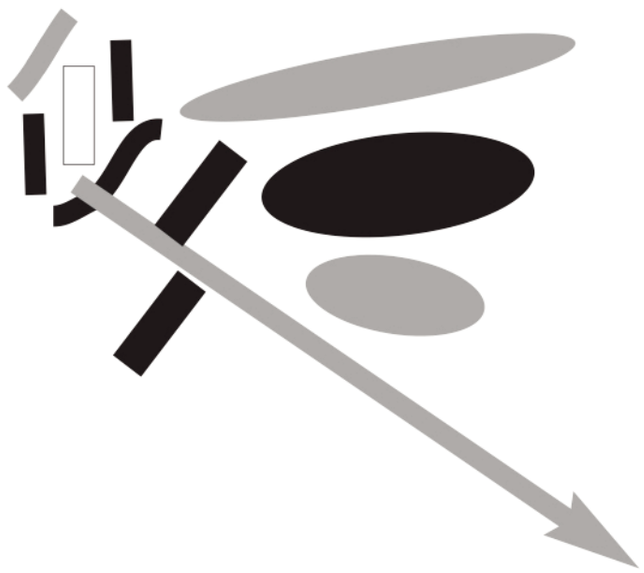
月　刊

# Mélange

VOL.75



2012.09.23

詩·エッセイ

月刊「Mélange」VOL.75　2012/09/23

月刊「Mélange」編集部

## 「月刊めらんじゅ」75号目次


詩

あなた・憧憬のモティーヴ……岩脇リーベル豊美　03
転形期……野口 裕　03
白骨……川田あひる　04
廃駅……三上やすお原文 千田草介改稿　05
勾配……中嶋康雄　06
ぐんたい……大橋愛由等　07
遠く離れた目印のように……高谷和幸　08
虫穴……中堂けいこ　09
放逐……寺岡良信　10
五三九日のち……にしもとめぐみ　10
Naoko……富 哲世　11

エッセイ

森羅万象その他もろもろ4……野口 裕　12
夜の調べに寄せて(不毛なナショナリズムの応酬を避けるために)……寺岡良信　14
神戸詞あしび(〈一九八〇年代〉、俳句が蠢いていた)……大橋愛由等　16


# ◆あなた・憧憬のモティーヴ

岩脇リーベル豊美

夢のなかで詩を綴っていた
いや　眠りではなく黙示だった
大河に臨む丘に立つと
光とエーテルの織り成す世界が浮かびあがり輝く
言葉は肉を受けすべての意味付けが一瞬にしてなされた
音声は詩となって光の世界に沁み亙っていた
黒い瞳孔はあなたの痕跡しか通さない
幻影を視ることなど日常の体験である
あなたとの合一は
未完の意味を浴びる秘儀からはじまる
廃墟に投げ入れられた半鳥半神の因循も
無時間に完結する身体のオルガニズムに抱かれている
飛翔の理由すら持たない羽が空から風に舞い
指先に受けるコスモロギー

乳呑児を初めて打つ雨に感じた悲哀が
この羽のように
土壌を慰撫する詩となるように

# ◆転形期

野口 裕

イカの食いすぎかなあ
箸からしたたる白いもんが笑いよる
（お前デモにも行かんかったやろ）
（そらまあそや　すんまへん）

また笑いよる
（人を見る目ないのう）
（悪いやっちゃと思てた奴よりも悪い奴が）
（とんでもないとこにおったやろ）
そらまあそや　すんまへん
でもなあ…

したたり落ちた白っぽいもんが
皿の上でとぐろ巻いとる
そっちに話しかけるように
でもなあ…

ワタの塩辛て好きやないけど
この際白いのんと混ぜてみよかと
ぽとり垂らしてぐちゃぐちゃやってみたら
なんや地図みたいになって
多分この辺に悪い奴おるんやと
箸で突っついたら
まだ箸の上におる真っ白けが
（ふん！）
と怒ってた

ちょっとずつやけど
人見る目もやしなってるやろ
明日は借金貰わなあかん

## ◆白骨

川田あひる

船は割れ
囚われ
縛られて
わたしは

船の欠片と

流される
流される
流される

沸騰するやかん
鳥肌の
水滴
数粒
粒
粒
潰れない粒

流される
流される
流される

括られた痛みも
直射の熱も
乾きも
無い

カーテンを閉じた小屋
見張りの目を遮り
母さんと
つつましく
つつましく
憎まない
恨まない
にちにち草を
灯りに
罪を慰め

流され
流され
流され

辿り着くとき

白骨となり

足のロープを
ほどかれるでしょう



## ◆廃駅

三上やすお原文　千田草介改稿

実家のすぐ近くにある駅が廃止される。母からの電話でそのことを知ったとき、私の脳裏に同級生のFの笑顔が浮かんだ。彼はもうこの世にいない。二十歳のとき、その駅でとび込み自殺を遂げたのだ。

山陰の谷間にあるひなびた無人駅である。かつては駅員もいたが、最近では乗降客すらゼロに等しかったから、駅がなくなるのはいたしかたのないことだ。そもそも列車が一日に四往復ほどしか通らないローカル単線なのである。列車とはいっても、そう呼ぶのは首をかしげてしまう一両だけのディーゼルカーで、それがトコトコ走る。しかも朝夕だけで昼日中はほとんど運行されない。

そんな滅多に通らない車両に、Fは身を投げたのだった。いったい何を思ってのことだったのか？　私とFとは、高校時代まではごく親しかったが、卒業とともに私が郷里をはなれたことで疎遠になっていた。それから二年、彼が死ぬまでのあいだにその身におこったことを、私はよく知らなかった。

Fは遺書と日記を残していた。彼は自動車の運転過失で同乗していた後輩を死なせてしまい、そのことをひどく悔やんでいた。だれもが顔見知りの田舎のことだから、口さがない中傷が流れ、人殺し呼ばわりもされて、それがF自身の耳にもきこえたのだ。そんな身のおきどころのない苦悩が、日記にはつづられてあったという。

私はFが死亡事故をおこしたことはきいていたが、彼が死ぬほどに苦しんでいるとは思わなかった。あのとき彼の心のうちに気づいてやれていたら、というやりきれない思いが、駅の廃止の話とともに、またよみがえった。

しばらくぶりに帰郷すると、私は駅にむかった。自転車が五台ばかり置ける駐輪場は雑草が生い茂っていた。線路の下をくぐる薄暗いトンネル道をぬけ、亀裂の入ったコンクリートの階段をあがると景色がひろがる。頬をなでる秋の風が心地よい。プラットホームの端に、取り外された駅名板が無造作に置かれてあって、この駅が使命を終えたことを告げていた。

Fがとび込んだあたりをながめながら、列車が来るのを待つ彼の姿が、あのときたしかにここにあったのだと思った。どうして彼は、列車に乗らなかったのだろう。そうして遠くの都会に出てしまえば、彼の過去を知る者がひとりもない世界に行けば、きっとやりなおして生きていけたのにと思う。

そうせずに、彼は死の世界へと旅立ってしまったのだ。

私は道端で摘んできた彼岸花を、線路にむかって投げつけた。

## ◆勾配

中嶋康雄

食パンを牛乳に浸けて
しゃぶる
べちゃべちゃした
音だけが聞こえる
食べるじいさんは
先週死んだ
べちゃべちゃしたその音だけが
聞こえ続ける
遺品のミルクカップが
バターで汚れ続ける
新聞受けの手前のコンクリートに
カタツムリがぐしゃっと潰れて
異臭を放っている

少し離れた
車庫の手前では
巨大なミミズがドテッと死んで
乾燥と水ぶくれを繰り返している
音だけのじいさんに
おはようございます
どこから吹き寄せられたのだろうか
ビニール袋がダンスしている
音だけのじいさんと
ダンスしている
ぐしゃっとしたカタツムリと
ドテッとしたミミズが
ダンスに共振する
死体に生えた白い黴
ツユクサの真っ青な花が
風に揺れる

## ◆ぐんたい

大橋愛由等

小聖堂の裏手の庭に棄てられている礎石の地面に埋もれた側に刻まれた文字がぼくの夢に夜ごとひと文字ずつ代わって現れそれをやにわに背山から降りてくる鴉がそっくり同じ文字をかわたれ刻に発語していることを知り共夢の結ぼれがわからないまま朝刊の王族動向欄を読んでいる。

小やかな挨拶を庭木にするともぞもぞと葉鳴らしを始め群体認識を拒んでいるようで一葉ずつに文字をさずけるよう求めているかのようでたじろくぼくに頓着せず凶の風を送ろうとしているようで「でもお願い黙秘はしないでね」と弱気になったぼくが背負っていたのが羅梵辞典だったようだ。

どくどくと注がれる樹液の化学式にこだわっていたぼくは朝餉に出されたナランハジュースを廃嫡王になったばかりの男が最初の月曜日に飲むがごときに喉をホウホウならして呑んでいると人蔘の赫が月の引力を呼んで少しく黒味が増しているのに気づいて樹液を注いだその人に朝顔は日没の悲しさに半日も耐えられず咲き出すのですねと語ったのであった。

啼かなくなっても生きていたそれは智者となって三冊ずつの書籍をベッド脇に並べ替えてはパタタを湯がくたびにグラスゴーの鐘が聴こえてくるのだという嘘を伝えた三人の詩人たちはそれぞれ「きっとそれはぼくに授けられるはずだ」と気色ばんで放浪の準備を始めるのだが彼らが目指したのは配所の月が美麗に見える監獄を探すことだった。

不在であるがゆえにゆっくりと立っているひとがいてそのゆっくりの温度が少しずつ溶けていく水でいれた珈琲を飲んでいた〈語り終わったぼく〉はコート紙に印刷された美脚を一本ずつ確認しながら夏の終わりを書き付ける付箋は黄土色にしようと考えその室内のエーテルがすべて斜方形で出来ているのだと気づいた後でやはりぼくとぼくたちは群体であっても良いのではないかと想っていたのだ。

# ◆遠く離れた目印のように

高谷和幸

公設市場が浮かんでいた。周りを錆びに囲まれた案内図がゆれている。その先は蜘蛛の巣のような日用品が飛び交った跡がある。鳥賊みたいな下着。鳥が飛び立つシャツ。巣繕いする人間。適正な価格で水揚げされたばかりの店番もいた。歩く暗がりで、舗道がざらつくのはどうでもいい気がしていた。ここで自分の免疫性を拒んで、あなたは何も買えずに歩いていたのだな。夕日のようなアポートーシスだった。わたしたちの眷属は頭足類（火星人みたいなやつ）がお似合いで、思いやりが苦手で立ちすくんでいた。（あのとき玄関の向こう側に立っていたのはお父さんだったのか、それとも玄関の向こうにあなたがいたのか、もうどうでもいいと思う。）とっくの昔に音楽と詩は毀れていて、チェロを弾くネズミをペットにする連中だった。あふれる水の毒性だけが排水溝をめざしている。うんうん唸るエアコンほども効き目のない破れた天幕だった。広場に大きな火焔樹が燃えていて、それをアンカーにして人々が上陸してきたのは百年も昔の話だが、むこうに光る船の公設市場が浮かんでいる。遠く離れた目印のように。



# ◆虫穴

中堂けいこ

虫は栗の実の中で
自身の穴を食んで
形を残す　一日分
次の日は少しずらして体分の穴を食む
およそ一週間で栗は食い尽くされ黒い渋皮が残る
わたしが食べる穴は一坪に実る籾米
両手で三掴みの白米を口にするとき
わたしの体分の穴を一坪の田畝に見立てる
明日も生きるとしたら隣の一坪を食い尽くす
一年生きるとしたら一反の田畝が産む熱量が必要だ

この国が何人も飢えさせないとしたら
一億反の田んぼで食う人々は這いつくばって
苗つくり草取り田植え草取り水分け草取り肥えやり草取り虫よけ
鳥よけ雷よけ草取り水喧嘩畝張り草取り案山子も作りやっと稲刈り
稲干し脱穀藁詰め精米　わたしの口へ口へまた一年

そんなこんなで虫には栗がわたしには一坪の土が
今日の穴の寸法なのだ
土をそのまま食べることができるという寸法なのだ
身のほどの穴に見合う生き方はおそらく明日の墓穴を約束する
この穴は名付けられねばならない
　虫ならば虫の名
　詩なら詩の名
　わたしならわたしの名
小さな窪みはたとえば（フェルナンデス）

大きな生姜糖を割って子供たちに分けている
生姜糖の中には煎り豆が入っていて
たまに虫がついている
そんな話をしながら子供たちに生姜糖の欠片を渡している
子供たちは可愛い顔をしているがみんな犬や猫だった
わたしが見知っていた動物らしかった
一人とりわけ目立つ少年がいてふと柴犬の顔をした
どうやらわたしが小さいころ家にいた犬らしい
名前を呼ぶと笑い出した
生姜糖を両手で掴み口を横に開けて笑っている
皆が笑い出した
わたしは笑いながら眼がさめた。

## ◆放逐

寺岡良信

落日に片頬を削がれて
男は蒼ざめた影となつた
二千年の眠りを眠るために
時が男に課した
二千年のつとめ—
爪に溜まる夕陽の痛みに堪へ
鏃を磨く荒涼たる心の軋みよ
倭は帯方東南大海のなかに
今日も赤錆色の疲労を
沈ませる

さうさうと波打つ
樹海を逐ひ
血族を奪ふものは誰か

逃水に
槍を放てば
遙か地平で
森が啼く

## ◆五三九日のち 閑上地区にて

にしもとめぐみ

どこまでもがざらついた基礎ばかりが残っている
雑草がおおい茂っているところ
塩害で赤茶けた草木などの中に
いくつかの小さな四角の穴があいていた
墓場だ！
墓石がとばされた墓場だ！　と気が付いた、
一瞬、車窓を通り過ぎた

人々の暮らした痕跡は誰も通らない道と、
立ち残り、放置された住居の割れた窓ガラスと、
ひしゃげて曲がったガードレールやフェンスや街灯と、
鉄類ばかりが盛り上げられてある空き地と……、

防潮林は、数本だけが立ちすくんでいた

仙台空港の土産物売り場で店員さんと
「その時どうされていました」
いくつかの会話のあと
「……寒かったこと
食料のことを考えていました」
大丈夫だった人々は生活を再建して
大丈夫でない人々の姿は見えない



## ◆Naoko

富哲世

揺らめく頬の藪に分け入り
夜と昼の
痩せた記憶を巡らせて
天女のかげの見え隠れする
見覚えの距離を歩く
あやうい帰還を果たしたとき
梢で小鳥は囀り
世界はひとつことばを違えて
小銭を数える仕種みたいに
出奔の岸の安らいに
身をやつそうとしていた

大丈夫だよ
暮れ残る夕空を追いながら
君がすべてをあきらめて
明るい祈りの広場に出て
さみしく死んでいったとき
ぼくらは振り向くきみの夢の
不毛の火の根を

翼を苅り取るきょうの苦役の風の中に
接いだのだ
もえあがるうしろ姿の　——思い出として
ただ在るだけでよかったきみの渚に
寄せては返す
誰にも打ち明けることのなかった
溢れる想いの
それが最後の
ただ一通のメモだから
それはいつか
無垢な子供の手が開く
ぼくらのクウの名前が
土のなかでひとつになる
鄙びた絵本の物語だから
大丈夫だよ
きみはぼくらの沈黙の
ことばだから
きみのさみしさはほんとうだから
きみはぼくらよりさみしかったわけじゃない
きみはぼくらよりひとりだったわけじゃぁない
いのちに溢れた
この空の下で

# 森羅万象 その他もろもろ

野口裕

## カイエ談談04

八月のとある夕べ、ちょっとした空き時間ができ、小半時ほどを駅前の大型書店の文庫本フロアで過ごした。立ち読みというほどのこともなく、背文字を眺める暇つぶしがこころよい。漫然と眺めつつ、何か一冊購入しようとするが、こういうときほど買う本が決まらない。『風流冷飯伝』を読んだときの心地よさが忘れられず、米村圭伍の新刊があればと思ったが、見当たらない。後で調べると、今年に入ってからの新刊はないようだ。

最近に入ってからの直木賞や芥川賞作家の作も並んでいるが、食指が動かない。村上春樹も同様。気分を変えて、ホメロスなどもよいかと思うが上下二巻がこういうときの気分にそぐわない。科学もまた人間くさい所行の連続であることを再認識させてくれる貴重な作家、サイモン・シンの新刊があるはずだが、まだ文庫本になっていない。すでに読んでしまったタイトルばかりが並んでいる。最終的に手に取ったのが、新潮文庫の橋本治『小林秀雄の恵み』。売れ筋なのか、分厚のこの手の本にしては税込み七百円と手ごろな価格。最初の一、二頁を読んで買うことにする。

思えば彼は、『江戸にフランス革命を！』で、

> 法論理に神秘をからめちゃうのが合理主義以前の前近代っていう時代だけどさ、〝神秘〟という一線をどこに引くかっていう見極めがまだ甘いっていうところが、近代合理主義の限界っていうとこだよね。

と書いた。

リーマンショックに際して、「信用収縮」という言葉が飛び交った。信用という訳のわからないもので、恐慌が起きてしまう。その事実を重ねてみると、たしかに合理主義は〝神秘〟に対する見極めが甘い。

今回の冒頭では、

> 二〇〇一年の終わり―『「三島由紀夫」とはなにものだったのか』を書き上げてしばらくした時、ふっと「小林秀雄」を思った。「三島由紀夫をやっちゃったら、次は小林秀雄か志賀直哉か島崎藤村かな」と思って、「やっぱり小林秀雄だろうな」と、そんな風に思った。

と書かれている。近代が〝神秘〟をどのように見極めたかを見ようとする、問題意識は一貫していると思った。

私は、内田樹ほどの熱心な読者（橋本治へのインタビューをまとめた、『橋本治と内田樹』がある）ではないから、主著ともいうべき『桃尻娘』シリーズや『窯変源氏物語』、『双調平家物語』を読んでいるわけではない。先に上げた『江戸にフランス革命を！』の他は、『三島由紀夫とはなにものだったのか』、『桃尻語訳枕草子』、『これで古典がよくわかる』などを読んだばかりだが、どこでも通底する主題は先に上げた一文に集約される。

近代に対する疑念という点では、問題意識を共有する作家は多いだろう。彼の特徴は、主著に古典の翻訳が含まれているとおり、その問題意識をさかのぼって理解しようと努める点にある。内田樹のインタビュー本によれば、彼が編み物に関する本（『男の編み物、橋本治の手トリ足トリ』）を書いた理由の一端は、写生文に対する理解を深める点にあったという。

正岡子規に始まる写生文は、その周辺に漱石がいたことからもわかるように、今日の日本語の根幹をなす口語自由文、要するに散文発生の重要な鍵を担っている。明治期に散文に対する様々な実験がされたことは文学史に詳しく載っているだろうが、編み物の本を書くことで写生文を実践、あるいは再確認しようとする彼の姿勢はユニークである。

ゴローニン事件でロシアと交渉に当たった高田屋嘉兵衛は、浄瑠璃本しか読んでいなかった。浄瑠璃本で得た日本語のレトリックがロシアとの交渉術の支えになった、とするのが司馬遼太郎の『菜の花の沖』であり、本文の中で繰り返し強調される。

我々は散文でものを考えていると、我々は考えやすい。しかし、今日の思考様式が散文に支えられているにしても、それ以外の文章様式が寄与する点はないだろうか。高田屋嘉兵衛の例は、その点に関する反省となりはしないだろうか。残念ながら、司馬遼太郎の教えてくれるのはここまでのようだ。

橋本治は、今回の本で小林秀雄の『本居宣長』を取り上げる。そのために、まず宣長の偏愛した『源氏物語』に向かう。そして、『源氏物語』において、地の文では登場人物の生の声が登場せず、登場人物たちが贈答しあう和歌の中にのみ生の声が存在することに注意を払う。

原文で『源氏物語』を読む人間は、「作中の和歌を飛ばして読む」などということをしないだろう。しかし、現代語訳で『源氏物語』を読むと、どうしてもそういうことは起こる。なぜかと言うと、地の文は現代語でも、和歌の部分はそのまま「平安時代の言葉」だからである。他の部分は分かって読んでも、和歌の部分は分かりにくい―だから、飛ばして読んでしまう。『源氏物語』を現代語訳する人間は、普通、和歌まで訳さないからだ。しかし、『窯変源氏物語』を書いた私は、和歌までいじってしまった。和歌は作中人物達の会話であり生の声であるから、そこを飛ばして読まれては困るのだ。（中略）

言うまでもない、『源氏物語』の作中人物達は、これを読む読者の生きる現実より数層倍も複雑な「作中現実」を生きている。その中で、彼や彼女は「自分達の声」を和歌にして発する。虚構ゆえの深みから発せられた声は、単調なる現実に生きる者達の語る声よりずっと深い。深いがゆえに、現実に生きる読者達に対して、「その思いはありうる」と実感させる。その声はあり得るのだが、しかしその声は、現実とは合致しない。

現代短歌の論議で「我」や「私」にかわる言葉として、「作中主体」なる語がよく登場するが、「作中現実」という言葉も魅力的ではある。もっともそれは脇に置いておこう。問題は、なぜ地の文で登場人物の生の声が出てこないかという点だが、橋本治は、

> もちろん、『源氏物語』の作中歌には、登場人物達の「生の声」がある。そして、登場人物達の「生の声」は、作中歌にしか聞かれない。なぜかと言えば、『源氏物語』は、作中人物に対して作者が敬語を使う物語だからである。
>
> 作者から敬語を奉られる作中人物達は、ヴェールの向こうにいる。敬語の度合いが高まれば高まるほど、読者あるいは作者と、作中人物を隔てるヴェールは厚くなる。そのヴェールの向こうから聞こえて来作中人物達の声は、「敬語を使われる」という制度上の立場に合致した、ありうべき予定調和の声ばかりである。和歌を除いた『源氏物語』の文章の中に、登場人物の「生の声」はない。（中略）作中人物達に敬語を使う作者は、「生の声」を緩衝し、遮る立場にさえある。そのヴェールを越えて聞こえて来る「生の声」は、ただ一つ和歌であり、『源氏物語』の作中歌は、間接話法で貫かれる文章の中に登場する、唯一の直接話法なのである。

と説明する。敬語というものを使わざるを得ない日本語の特性を理解しつつ、生の声が登場する契機を韻文に見るという構造を提示する。

> 和歌は、敬語とは無縁の世界に存在する。であればこその「生の声」である。和歌の遣り取りをする二人の人間の間に、身分の上下はない。あっても、それを無効にすることが、和歌の遣り取りである。敬語という制度に侵された日本語の中で、和歌は唯一この規制から免れている。（中略）
>
> 和歌は、敬語によって成り立つ制度社会のあり方そのものを、無効にしてしまう。無効にして、しかし和歌というものは、長らくその制度社会の中枢に公然と存在していたものなのである。

このような行き届いた理解のもとに、小林秀雄という近代的な知性を読み解いていこうというのが彼の戦略だが、その道筋は困難を極めるだろう。書いたそばから、

> 『本居宣長』を書いた小林秀雄でさえ、そのような理解を明確にしていたかどうかは分からない。その理解が明確でないからこそ、彼の『本居宣長』は、難解の繁茂する悪路を突き進むことになるのだと思う。

と、先行きの混迷を宣告する。

ここからもう少し先の所まで読んではいるが、まとめられるのはここまで。のたりのたりと続く春の海のような彼の文章が、小林秀雄の悪路をどこまで埋めてくれるかは今後の楽しみとしておこう。もっとも、すっきりとまとめられるのはここまでかな、という気もしないわけではない。

彼の著作をいくつか読んでみると、最初は明確な設計図から出発するのだが、いつのまにか訳が分からなくなっていることが多い。それは、彼が論をまとめるのではなく、様々な例証から論点を数え尽くそうとする態度に傾きやすいことに由来するのだと思う。その点が、彼の作品に対しての論評の少なさとなるのではないか。

訳が分からなくなってからも、個々の例示に感心することも多い。他者の評とは無関係に、読めば必ず色々なことに気づかされる作家として注目していきたい。

# 夜の調べに寄せて

NO.044　寺岡良信

## 不毛なナショナリズムの応酬を避けるために

1

「外患」は竹島問題から始まった。

韓国の李明博大統領が、日韓関係の修復を呼びかけたとする野田首相からの親書を突き返した。突然の竹島上陸といい、天皇の訪韓条件に謝罪要求を持ち出した発言といい、常軌を逸する非礼なやり方で、支持率において劣勢のままもうすぐ任期切れを迎える指導者が、韓国内の強硬意見におもねってナショナリズムを煽ろうとしたばかりに、そのナショナリズムに自らがからめとられ、二進も三進も行かなくなった光景は醜悪そのものである。

日本政府の対応も、けっして褒められたものではない。親書を返しに来た在日韓国大使館の外交官を門前払いにしたことに、官邸の意向が働いていたのかどうなのかは知る由もないが、結局は書留郵便で送りつけてきた件の親書を受け取らざるを得ぬ結果となり、礼節を尊んできたはずのアジア両国は、その矜持を自ら損うはめになった。

だが私が今一番憂慮するのは、韓国の指導者の軽率さと思慮の無さではなく、また「毅然とした対応」を口癖にする日本の首相や外相から発射される、一歩軌道を外れれば事態を一層難しくするであろう「正論」による矢継ぎ早の反撃でもなく、これによって日頃から反韓感情を募らせている日本国内の狭隘な「愛国世論」が勢いづき、石原慎太郎や橋下徹などがいっそう低劣で危険なポピュリズムに走るであろうという、誰もが予想できる展開に対してである。煽動屋に背を押されたナショナリズムは、煽動屋の予想を超えて暴走する。ナショナリズムが一方通行のものでない以上、それは応酬を重ねるたびに膨れ上がり、緊張が極限に達したとき、それ自体は取るに足らぬほとんど偶発に近い出来事によって暴発するだろう。そんな事例が歴史には無数に散らばっているではないか。

そうした歴史を教えることを務めの一つとして、私は三十八年間、高校の教壇に立ってきた。私の専攻は日本近現代史で、とりわけ日本と朝鮮との関係を歴史的事実に基づいて生徒たちに伝えることに、心を砕いてきた。過激で偏狭なナショナリズムが多くは歴史への無知と恣意的な解釈から生まれるとすれば、さしあたり私は日本の若者たちに以下のことを語らねばならない。もとより私が語り得るのは「竹島」という日韓の火だねの背後に横たわる歴史的事実についてであって、政治的提言ではない。だが最低限こうした事実を国民が共有することこそが、エキセントリックなナショナリズム―最悪の場合その行きつく先は国交断絶であり、戦争であろう―を鎮静化するのに、微小なりとも役立つと信ずるがゆえである。

2

一九〇五年一月二十八日、日本政府は無人島である竹島を日本領土に編入し、島根県の所管とすることを閣議決定した。国際法上、こうした領土の取得を「先占」と呼び、この「先占」を正当と見なす根拠の一つに、竹島は以前から日本人が行き来していた島で、そのとき明治政府はここをすでに固有の領土と認識しており、「歴史的権原」を有していたという主張が挙げられる。さらに閣議決定以後、政府は調査団を送り、漁業権を設定し、国有地使用料を徴収するなど行政権を行使した。これに対して大韓帝国（以下韓国と記す）は公的な抗議も対抗措置もおこなわなかったから、日本の領有権が確定したというのが、現日本政府の見解である。しかしこうした法理論が韓国側を納得させられないことを、日本政府は知っているだろう。韓国側は歴史の問題を、すべてに優先する形で主張するからである。歴史を持ち出されると、日本の旗色は俄然悪くなる。だが竹島領有の正当性を論議するとき、その歴史的位相を抜きに進めることは、明らかに韓国の国民感情への洞察を欠く、硬直した形式論理で、これでは意思疎通を阻む最初の石を取り除くことさえ困難であろう。だから私はこれに、日韓をめぐる当時の歴史的状況という物差しをあてて考えてみたい。

明治政府が竹島の領有を閣議決定した一九〇五年一月は、日露戦争（一九〇四年二月十日宣戦布告、一九〇五年九月五日講和条約締結）のさなかであり、日本軍はすでに朝鮮半島を制圧していた。当時日本の官民のあいだには、ロシアの南下に対する強い警戒心があった。日本の独立をロシアの侵略から守るために、「利益線」である韓国を確保しなければならない。これが対露戦争に踏み切った日本の主張で、戦端を開いた日本は韓国政府に対し「日韓議定書」を結ばせて、軍隊の移動や物資移送の自由を手中にした。司馬遼太郎氏の『坂の上の雲』は日露戦争を「祖国防衛戦争」として描き出したが、司馬氏自身も触れているように、それが韓国の犠牲において遂行されたことを忘れるべきではない。一九〇四年八月二十二日の第一次日韓協約では、韓国政府に日本政府の推薦する財務顧問（日本人一名）と外交顧問（外国人一名）を雇用すること、韓国の外交案件は日本政府と協議の上決済しなければならないことを認めさせたし、一九〇五年七月二十九日の桂・タフト協定では、アメリカのフィリピン支配と日本の韓国支配を相互に確認し、八月十二日の日英同盟の改定では、韓国とインドを日英相互の「縄張り」として認め合うところまで行くのだ。ここからはロシアとの講和条約であるポーツマス条約で、「日本国ガ韓国ニ於テ政事上・軍事上及ビ経済上ノ卓絶ナル利益ヲ有スルコト」をロシアに承認させ、十一月十七日の第二次日韓協約で韓国の外交権を奪い去るまで、まさに一瀉千里の迅速さだった。確かに日露戦争は明治維新によって近代国家の仲間入りを果たした日本が、独立存亡を賭けて立ち上がった「祖国防衛戦争」でもあっただろう。しかしその日本が韓国に対して、あるいは韓国をめぐっておこなった行為は、帝国主義的野心に満ちた「切り取り強盗」だと非難されても仕方がないものである。そしてこの帝国主義政策は、一九一〇年八月二十九日の韓国併合につながってゆく。

こうした文脈の中に竹島領有を置いてみたとき、はたして国際法を盾に取った法理論だけで正当化できるのかどうか、少なくとも私には逡巡が起こる。当時の韓国政府が「竹島」（韓国名トクト）をどの程度に認識していたのかは、私には分からない。が、韓国政府は抗議もせず対抗措置も取らなかったという言い分には、歴史的想像力が恐ろしく欠如しており、せめて若い人たちには、史実関係をきちんと認識して欲しいと願うばかりである。

3

太平洋戦争に日本は敗れ、朝鮮は独立を取り戻したが、それは民族の分断という悲劇となってあらわれた。一九五〇年六月二十五日、北朝鮮軍の韓国侵攻で始まった朝鮮戦争は、アメリカの対日政策の転換を決定的にした。日本を西側陣営に繋ぎとめ、共産主義を防ぐ強固な防波堤にするため、太平洋戦争を法的に終了させ、日本を早期に独立させることが日程に上った。これがサンフランシスコ平和条約である。講和会議への参加を拒否された韓国の李承晩大統領は、アメリカに対し、日本に竹島領有を放棄させることを迫ったが、これも取り上げられなかった。李承晩は一九五二年一月十八日に突如、海洋主権宣言をおこない、公海上に「李承晩ライン」を引いて、公海で操業する日本漁船を次々に拿捕した。まだ沿岸二百海里の漁業専管水域が設定されていない時代の出来事で、臨検・拿捕された漁船からは少なからぬ死傷者が出た。さらに李承晩は「ライン」の内側にある竹島を、改めて韓国領土であると主張した。その後「李承晩ライン」は撤回させられたが、竹島問題は日韓の係争事案としてくすぶり続けることとなる。

一九六五年六月二十二日に日本政府が朴正熙政権とのあいだで結んだ日韓基本条約は、日本による植民地支配の法的清算であり、このことによって大韓民国との国交が回復したが、さまざまな点で、複雑な課題を今日に残す結果となった。韓国を朝鮮半島における唯一合法的な政権として北朝鮮を排除したのも、その一つだろう。韓国の賠償請求を退け、無償給付・有償給付及び借款を「独立祝賀金・途上国支援金」という名称で支払ったと説明した、日本の国内向けの詐術的答弁もその一つだろう。ここから元従軍慰安婦から出されている賠償要求は、法的に解決済みという日本政府の公式見解が導き出される。もっとも日本政府は一九九三年の「河野談話」（宮沢内閣の河野洋平官房長官談話）で、慰安所の設置に日本軍が直接間接に関与し、虚偽や甘言をもってなされた本人の意思に反する強制が朝鮮人女性の名誉と尊厳を深く傷つけたことを詫び、一九九五年には政府と民間の醵金によるアジア女性基金も設立された。私はこのことを高く評価する。が、昨今は「河野談話」への風当たりも強く、「売春婦が金欲しさに騒いでいるだけだ」といった発言を頻繁に耳にする。韓国の世論が反日に傾くことと、日本でのこうした言動の蔓延は、先にも書いたように相互媒介的なのだ。「床屋政談」という言葉があるが、そうした愛嬌を遥かに超えて人の良心に毒槍をぶち込むような言説が、居酒屋での与太話で終わらず、教育関係者からも聞かれる現況については、以前にも書いた通りで、つい最近も同僚の教師が「シナもチョーセンも民度が低いなあ」と発言するのを聞き、中国籍・台湾籍、韓国籍・朝鮮籍の卒業生や在校生の顔を思い浮かべて心が痛んだ。私はこれこそ教育の頽廃、日本人の心の頽廃であると考えている。

そして今回の竹島問題である。日韓基本条約は、竹島の領有を棚上げにした。今、竹島問題にどんな解決法があるのか、それを提言する能力と資格が私にあるわけではない。ただ言えることは、国際法という杓子定規な言い方、相手が応じないことを承知の上で、国際司法裁判所に提訴するといった政略の臭いがふんぷんとするやり方ではなく、いつでも歴史に立ち返る謙虚さと誠実さが求められるのであろう。日韓基本条約は「韓国併合ニ関スル条約」とそれ以前のすべての条約・協定を無効としたのだから、日本が日露戦争の渦中におこなった竹島領有の閣議決定も、非公式協議の対象にしてよいかも知れない。

国民国家（主権国家）は国境線に関して、「ゼロサム」以外の論理を認めない。だが東アジアで長らく隣人として交わってきた両国に、あえて国境線をルーズにして、両国漁民が共存できる水域があってもよいのではないかと、先日朝日新聞の「耕論」欄で、一橋大学の若い韓国人研究者が語っていた。私はそれを読みながら、五十歳で通った大学院で西川長夫先生から学んだ「国民国家論」を反芻した。――「ゼロサム」の領土とナショナリズムに鎧われた国民国家は、今後もしぶとく生きつづけるだろう――だがこのシステムで飼い馴らされた国民が危険な怪物となろうとするとき、われわれはその都度、システムそのものを疑い、欠陥のある個所を更新しなければならないのではないか？竹島と尖閣という二つの「外患」に直面して、あらためて私は先生が示された先見の明に蒙を開く思いだ。

私のこのささやかな発言が、若い人たちの心に届いてくれれば幸いである。

（これは富哲世さんのブログ「詩の前で」に載せていただいた文章を、あらたに加筆修正したものです）

竹島問題の歴史的背景

# 神戸詞（うた）あしび

## 64-2012.09　大橋愛由等

「一九七〇―八〇年代　俳句ニューウェーブ〈攝津幸彦〉を読む」とタイトルが付けられたシンポジウムが、九月八日(土)に、神戸市灘区の神戸文学館で開催された。

摂津幸彦（1947～1996)は、兵庫県但馬(養父郡八鹿町)生まれ。関西学院大学で学んだ、一九七〇―八〇年代にかけて俳句界に大きな刺激を与えた〈俳句ニューウェーブ〉の一翼を担った俳人である。今回のシンポジウムでは、世代の異なる俳人が参集して、攝津の作品を再読し、語ることで、攝津の俳句世界をもういちど二〇一〇年代の今に再設定しようという目的で行われた。パネラーに、堀本吟、中村安伸、岡村知昭の各氏。司会進行は私・大橋が担当した。この四人はいずれも攝津が中心となって創刊した俳誌「豈」の同人である。

このシンポを終えて感じるところがあるのでまとめてみよう。

### 〈一九八〇年代〉、俳句が蠢いていた

まずは「俳句ニューウェイブ」という呼称についてである。私や堀本氏にとっては間違いなく七〇―八〇年代に、俳句を解体含みでとらえ、ジャンルを越境しようと創作活動を展開していた一群の俳人たちの意気と作品を示している。しかし、三〇歳代の俳人たちにとっては違うようである。九〇年代に小林恭二が岩波新書で展開した俳人以外の人たちを包含して俳句を再構築してみようとするマスメディアの影響下で展開された一連の動向を想起するのだという。もっとも、私が措定している「俳句ニューウェイブ」の人たちが、七〇―八〇年代にこの呼称のもとに作家活動をしていたという自覚はほとんどなかったものと思われるが、ひとつの傾向性を持っていたことは認めることが出来よう。俳句を解体ぶくみでとらえる―といった彼らの当時の意気込みはそれなりに熱気のこもったものであった。

マルクスは、世界を変革せよ、といった。ランボーは、生を変革せよ、といった。われわれは、俳句の変革を目指したいと思う。

これは一九八四年に編まれた「俳句・１９８４」(南方社)のあとがきに書かれているもので、冨岡和秀氏の筆によるものである。この当時の俳人たちの意気を充分に感受できる表現である。この当時俳句という定型を、作者の中でいかに位置づけるか(『解体してにもう一度向き直ってみる)について格闘した時代であった。冨岡氏はさらに続ける。

人間は澱んだ流れにはたえられないものである。自由への希求であろうか。定型と自由は相反するものではなく、ある関数でとり結ばれていたものである。自由への希求がなくなるとき、定型もまた荒廃するだろう。荒廃しないためには新しい息吹が必要なのだ。

当時火傷をしそうな熱情である。定型という日本の文化体系そのものに対して否の意思表示を示しつつも、その定型にこだわり続け自己矛盾が創作にかけるエネルギーとなっていったのである。

私が俳句と本格的に出会ったのは八〇年代だった。出版社(海社)に勤務して、〈俳句ニューウェイブ〉である俳人たちの句集・評論集の編集担当をしていた時である。坪内稔典、宇多喜代子、久保純夫、西川徹郎、江里昭彦氏らの作品を編集者としてさばいていたのである。同社の社主は詩人であり、詩集も多く編集担当したが、当時のわたしを深く魅了したのは、詩ではなく、俳句であった。それはなにより俳句が〈詩〉としてラディカルに光彩を放っていたからである。

攝津幸彦はあの時代の息吹きを充分に感知して俳句に体当りして表現してきた詩人の一人なのである。

9月8日神戸文学館で行われた
攝津幸彦に関する俳句シンポジウム


詩と評論
月刊『Mélange』VOL.75
めらんじゅ

2012年09月23日　通巻75号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1　2F
編集人／大橋愛由等〈『Melange』同人〉
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円（税込）